「社会知性」を体現する校友たち

わ れ ら 専 修 人

File No. 170

ZIP-FMナビゲーター

AZUSAさん

（平8・英文）

あずさ●愛知県渥美半島出身、６月９日生まれ。文学部英米文学科卒業後、豊橋市のコミュニティFMにて番組制作に携わる。その後上京して、番組制作会社に２年勤務した後、FM愛知で６年間『ラブ・オンライン』のパーソナリティーを務める。番組終了後、１年の語学留学を経て、ZIP-FMのナビゲーターとなり、現在に至る。

“二番手の美学”で相手にフィットし、自分の言葉をリスナーに届ける

活発なキャラクターと、リスナーに親身に寄り添う姿勢で人気を博す、
愛知県のＦＭ局、ＺＩＰ-ＦＭのナビゲーター・ＡＺＵＳＡさん。
大学時代に打ち込んだラクロスの経験や、番組終了という挫折で得た気付き。
すべてがラジオに生かされているという、ＡＺＵＳＡさんの仕事観を伺った。

「今の自分を形作ってきてくれた中の一つが、専修大学でした」

愛知県のFM局ZIP-FMでナビゲーター、いわゆるラジオパーソナリティーを務めるAZUSAさんは、ラクロス一色の専大ライフだったと振り返る。

「ラクロスは日本に入ってきて間もない珍しいスポーツで、学生が協会を立ち上げて、日本に広めていこうとしていたタイミングでした。私も知らないし、みんなも知らない。そこが面白いと感じた↗んです」

新しいスポーツだったため、ルールも整備されていなかった。サッカー場くらいの広さのコートでプレーするのだが、当時はエンドラインとサイドラインがなく、ボールがコートから遠くへ離れると、審判が「このくらいでいいだろう」と判断して試合を中断したという。しかも、誰がボールを出したのかは関係なく、その時点でボールの近くにいるチームにプレー再開の権利が与えられた。

「始めた頃は１チーム12名でしたが、途中でルール変更があり10名となって、今ではエンドラインとサイドラインもできています。先輩たちが新しいスポーツを導入して、他大学のメンバーと一緒に話し合いながら競技としての形を整えていく。そうして決めたルールによって大会を開き、勝敗が決する。先輩たちの背中を見ながらその場にかかわることができたおかげで、すべてが腑に落ちるというか、ブロックがきちっと組み立てら↙れて道筋が整えられていく感覚が、とても魅力的でした」

また、「許すこと」を教えてくれたのもラクロスだったそうだ。ラクロスは非常に激しいスポーツで運動量も多い。ボールを落とさないように走るだけでも技術が求められるため、ミスすることが当たり前だった。

「息も絶え絶えになりながらパスしたボールを相手が落としてしまったり、先輩が必死につないできたボールを私がミスしてしまったり。成功の数の方が圧倒的に少ないのですが、それを許し合って、お互い様という精神で一緒になって成功を目指していくことを学んだ気がします。おかげで、社会へ出てからも“許せない”がないんです（笑）」

卒業してから26年ほど経った今でも、同じチームとして夢中で取り組んだ当時のラクロスのメンバーとは交流が続いている。AZUSAさん自身は生放送があるため参加できないこともあるが、５年ごとに集まってパーティーを開いたりしているのだという。

「一生できる仕事」に踏み出し いきなりの大抜擢

ラクロスにどっぷりと浸かった学生生活を過ごしたことで、卒業後はスポーツ番組の制作に携わりたいと、番組制作会社を受けるも失敗。どうしようか悩んでいたとき、家業を継ぐよう諭されて愛知県へ戻らなければならなくなった。しかし、嫌々引き戻されたようなものだったため、仕事に身が入るわけがない。そんなとき、地元にコミュニティFMができ、パーソナリティーを募集していることを知った。

「締め切り前日に履歴書を送ったら受かりまして。実家の仕事をしながら夜だけしゃべる仕事をさせてもらいました」

２年ほどして家業を継ぐ必要がなくなったため、番組制作への想いを叶えるために再度上京し、番組制作会社に就職。日本テレビの番組制作に２年ほど携わるも結婚を機に退職することになる。

「番組制作会社にいたとき、チーフディレクターから『この仕事は、女性が一生続けるのは難しいから他にやりたいことを見つけろ』と助言をいただいて。そのとき頭に浮かんだのがラジオでした」

そこで、退職後にDJ養成スクールに通い、オーディションを経てFM愛知で朝の帯番組のパーソナリティーを務めることになった。コミュニティFMでパーソナリティー経験があったとはいえ、いきなり帯番組を任されるのは大抜擢だ。

音楽やミュージシャンの魅力を自分の言葉で伝えるのも、AZUSAさんの持ち味のひとつ

そして、ここからAZUSAさんの本格的なパーソナリティー人生がスタートする。

「独り」を知っているから「一人」に言葉を届けたい

彼女がラジオを聞き始めたのは子供の頃だったが、その魅力に気づいたのは高校１年生のときだった。愛知県渥美半島で生まれ育ったAZUSAさんは、高校から親元を離れて寮生活をすることになった。寮は個室だったが部屋にテレビはなく、当時はスマホもインターネットもない時代。部屋で一人の時間を過ごす中、何気なく聞いていたラジオから知っている曲が流れてきた。

「私が英語を好きになるきっかけをくれた先生がいて、その先生が中２のときに教室でビリー・ジョエルの『Honesty』を流してくれました。歌詞の『Honesty』の部分だけを伏せ字にし、曲の感じや英語の歌詞を聞いて、あなたならここになんと入れますか、と。それ以来、『Honesty』は自分の中の大事な曲の一つになっていたんです。そういった大切な曲が、突然ラジオから流れてくる。何か自分が意図しないところで世界とつながったような気がして、ラジオって面白いなと思うようになりました」

また、ホームシックになっている彼女を支えてくれたのもラジオだったという。

「高１で親元を離れて寂しかったんでしょうね。パーソナリティーのお姉さんが、自分に語り掛けてくれているような気がして、それでホームシックを埋め合わせていました。だから、自分がラジオで毎朝しゃべりはじめたとき、高校生だった私を励ましてくれたお姉さんになれているように思えて、みるみるうちに気持ちが入っていくのを感じました」

ラジオの魅力にどんどんはまっていく自分を実感していただけに、６年間続いた番組が終わったときには大きなショックを受けた。語学留学と称して海外へ「逃げ出した」という。ラジオが聞こえてこないところ、かつ英語が通じる国ということでアイルランドを選び、学生ビザを取得してヨーロッパやアフリカを巡った。

「いったんマイノリティーになることで、どこの誰でもない自分になりたかったのかもしれません」

人は自己紹介するときに「どこどこの誰々です」という。そう表明することで何かに守られているように思えるのかもしれない。しかし彼女は、そういった自分を守ってくれるものから離れることで強くなれることを知っていた。地元を離れ高校で寮生活を始めたときも、誰も友達のいない専修大学へ進学したときも、最初は独りぼっちだったからだ。

「でも、どこの誰でもない自分と仲良くなってくれる人がいて、独りぼっちだった私でも、そこで社会をつくっていくことができた。それを知っていることが強さでした」

実は、ＦＭ愛知を離れる２カ月ほど前からZIP-FMに誘われていた。しかし当時は、地方でライバル局へ移籍することはタブー視されていて断り続けていたのだという。ＦＭ愛知から離れるときも考えは変わらなかった。だが、知り合いが誰もいない海外へ行き「どこの誰でもなくなった」ことで頑ななこだわりから解放された。2008年、ZIP-FMへ移ってから現在まで14年、ナビゲーターとして言葉を紡ぎ続けている。

専修大学時代のラクロス・メンバーと

広いコートを走り回るラクロスは、見た目以上にハードなスポーツ

当時は12人で行うルールだった。ユニフォームの背中には「SENSHU」の文字が

ラジオ業界は校友が少ないので「会うだけでうれしい」とAZUSAさん

“一番手”を輝かせる低反発枕のような存在に

AZUSAさんは、「二番手の美学」で生きてきたと話す。一番上の姉は非常に頭がよく、「あの人にはかなわない」という存在を小さい頃から身近に見てきた。そのため、中学生のときに読んだ『二番手の美学』という本に強い影響を受けたのだという。

「二番手でいるということは、一番手の凄さを認めるということ。他者に対するリスペクトを持つということです。この意識があるから、人や音楽、映画などどのようなものでも光る部分を見つけることができます」

専修大学には、全国各地から大勢の人が集まってきていた。ラクロスの先輩しかり、授業で出会う同級生しかり、その中には「かなわない」と思える人がいくらでもいた。そんなとき多くの人はどうやって勝つかを考えるだろう。しかし、二番手の美学を知っていた彼女は、大学で多様性に触れたとき、勝ち負けに拘泥することはないのだと気付いた。

「自分よりできる人が大勢いる中で、誰かと比べずに自分としてどう生きていくかを考えられるようになった気がします。オンリーワンの発想ですよね。こう考えられるようになると、どんなにすごい人であっても、その人も私にはなれないことに気付けたんです」

二番手の美学は、ナビゲーターという仕事においても役立っている。番組に迎えるゲストやリスナーが一番手であり、話を聞く相手や言葉を届けるリスナーに応じて自分は変わらないといけない存在だからだ。

「ラジオはエンターテインメントなので、いかに面白く、楽しく、気分よくしゃべってもらうかを大切にしています。そのためには、確固たるものをもっている方に自分をどうフィットさせられるかが大事。自分を貫いて相手の形を変えてしまっては面白くないからです。だから、低反発枕みたいな存在でありたいと思っています」

ラジオで話すうえでもう一つ大切にしているのが、「自分の言葉でしゃべること」だという。ラジオではディレクターなどが台本を書いてくれるのだが、そのまま読むのは大嫌いなのだとか。

「それはディレクターの言葉であって、私の言葉ではないから。誰かの言葉をしゃべるだけなら、私がその場にいる必要がないと思うんです。だから、台本は資料として使って、そこから自分が何を発するかを大切にしています」

しかし、自分の言葉で話すのは簡単なことではない。目の前にあるものに何を感じるかは感性が求められるだろうし、言語化するためには、知識の裏付けも必要だ。相手が話していることを理解して、自分が感じたことを誰かに伝えるには、多様な表現の中から自分の気持ちに最適なものを選ぶ必要があるからだ。

だが、母数となる選択肢が少なければ、適した表現を見出すことなどできないだろう。その選択肢の幅を広げてくれるものの一つが知識である。

だからこそ、AZUSAさんは番組の前にしっかり準備をして、知識や情報をインプットしていくという。

「知識が多いと相手との共通項が増えて、話が弾むし、会話も楽しくなります。ラジオを始めたばかりの頃は、知らないことが怖くて一生懸命準備していましたが、下調べをしたほうが仕事を楽しめると気付いてからは、準備の時間も楽しむようになりました。20年以上この仕事を続けてきて思うのは、知識は面白がるためにあるということです。だから、学生時代にもっと勉強しておけばよかったと本当に思います。大学でもう一度学び直す機会とかないんですかね。校友は割引してくれると嬉しいです（笑）」

楽しそうにそう話す姿は、AZUSAさんにとってラジオのナビゲーターが、まさに天職であることを物語っていた。

（2022年11月25日取材）